

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01059

研究課題名(和文) ヨーロッパ型口利き社会への招待 ソサイエティの効用に関する学際的研究

研究課題名(英文) Introduction to European Type of Relationship through
Recommendation-Interdisciplinary Research on Utility of Societies-

研究代表者

佐々木 博光 (Sasaki, Hiromitsu)

大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・准教授

研究者番号：80222008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：欧米ではソサイエティはプライベートな集まりであるが、「民主主義の学校」と称されるような近代的な機能を担ったと評価された。しかしそこには垂直的な人間関係(パトロネージ)や水平的な人間関係(ネットワーク)といった前近代的な要素も如実にみだされ、縁故や人脈といった社会資本を仲介する場としても機能していたことが近時指摘されている。これを例証するために主として中近世から近代にいたるハンブルクを例にとり、兄弟会や協会入会者のエゴ・ドキュメントを考察した。参加者も社会資本の獲得に大いに乗り気であった。このような前近代の名残といかに折り合いをつけるかが、民間の人材育成にとって鍵を握ることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育に携わったことがあるものなら、指導した人が突然見違えるように変貌し成長するのを目の当たりにしたことがある。「聖職」とよばれる職にあるものにとって、指導する相手が大化けするのに遭遇するのは何にも代えがたい喜びである。それは聖職にない人たちにとっても同様である。聖職にない人たちはその喜びに預かるために金品を使い好機を提供する。彼らが兄弟会や協会を組織し、財団を興すのはそのためである。結社で支援に相応しい人物を物色・選抜し、財団で該当者を支援する。そして支援を受けたものが開花するのを待つ。民間の施設が果たす教育的機能を明らかにし、それが公教育や社会といかなる関係を取り結んできたかを考察した。

研究成果の概要(英文)：In Europe and America societies are often characterized by "school for democracy", though they are really private gatherings. Therefore they are considered modern products. But there premodern factors of both vertical relationships such as patronages and closed relationships such as networks are found vividly. Thus it is recently pointed out, that they functioned also as places where social capitals such as connections are mediated. In order to illustrate this, I researched ego-documents such as diaries, memoirs and autobiographies by members of brotherhoods and associations mainly in Hamburg from medieval and early modern to modern times. The members were also very willing to obtain social capitals. How one comes to terms with such premodern remains plays a central roll in the private human resource development of modern times.

研究分野：西洋史

キーワード：ソサイエティ 協会 兄弟会 パトロネージ ネットワーク 人脈 人材育成 社会資本

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

協会、クラブ、結社といった民間の施設は、「民主主義の学校」と称されることがある。そこは参加者に民主主義的な価値観やルールを伝える場所だという含意がある。たしかにこれらの組織には教育的機能がある。しかしそれは一様に民主的な価値観を伝えるものなのであろうか。それとは異なる教育的機能を探索する必要があった。

2. 研究の目的

協会、クラブ、結社といったソサイエティは第一に社交の場であり、参加者にとって縁故や人脈を築く場でもある。それが商機に繋がることもあった。また機会を提供するサイドにとっては、支援したい後進を物色する場でもあった。ドイツ語圏において民間の人材育成がどのように推移したかを明らかにしようとした。

3. 研究の方法

研究期間はコロナの期間にあたっており、研究計画の遂行は困難を極めた。十分な史料調査が行えなかったために、期間を一年延長せざるを得なかった。海外に発注した文献の到着も滞りがちであった。それでも手に入った文献を消化するうちに、経済的な先進地域であったハンブルク市で結社活動も盛んであったことがわかった。事例研究としてハンブルクの結社活動の考察に着手することにした。

2022年度には客員研究員としてハンブルクに4か月滞在し、史料調査にあたった。そのさいふたつの研究項目を立てた。ひとつは、中世来の市長をはじめとする市の要職者の結社(兄弟会や協会)活動歴、財団役員歴を洗い出すことであった。ハンブルクには市長や市参事会員のリストのようなものがまだなく、このようなリストづくりから始めなければならなかった。この作業は、公職につくまえの民間での活動歴に一定のルートのようなものがなかったかどうかを確認するために行われた。つぎにハンブルク市民が残した日記、自伝、回想録などのエゴ・ドキュメントを考察した。そこにはしばしば結社への入会動機や結社活動の様子についての言及がみられることがある。

これらの考察を通じて、民間の人材育成が公教育のそれに劣らず重要であるという認識があったこと、民間の人材育成の成否が国や社会の将来を占ううえで鍵を握ったということ、今後の考察の前提として確認した。

4. 研究成果

ハンブルクでは市長は正副の2人体制をとっており、1293年から1945年までに正副あわせて総計177名の市長が交代した。また市参事会員は記録のある1245年から1929年までに821名(のちに市長になったものもふくむ)ほかに要職として、法律顧問が1437年から1920年まで82名、市参事会書記が1351年から1920年まで124名確認された。これらの面々のリストは作成されておらず、一次史料の翻刻を通じて名簿をつくることから作業は始まった。

これらの人物の一部については、ハンブルク州立公文書館の研究員が中心となって編纂された『ハンブルク人名事典』に解説があるが、多くは学歴や歴任した公職を紹介するのみで、ソサイエティの会員歴や財団の役員歴といった私的な活動に言及がなされるのはまれである。そこでそれを復元するためにそれぞれの人物が登場する文書、各種ソサイエティの会員名簿、財団の役員リストを調査し、それらをつきあわせる必要があった。こうして要職にあった人たちのソサイエティ会員歴、財団役員歴を一人ひとり埋める作業をつづけた。まだほんの一部を完了したにすぎないが、将来要職に就くものは早い段階で地元のソサイエティに加入し、そこでの縁を挺に、もしくは家族や親族の後ろ盾を得て、財団の役員職についているケースが多々みられた。

政界・官界の要職就任者は、中世後期以降徐々に大卒の法律家によって占められるようになってきた。しかしハンブルクには久しく大学が誕生することがなかった。最初はおなじハンザ都市のロストック大学で、1730年代以降は新設のゲッティンゲン大学で学位を取得し帰郷したものの比重が際立った。ハンブルクには1613年に大学予科にあたるアカデーミッシュェス・ギムナージウムが設立されるが、それが法学部等の上級学部をそなえる大学に発展することはなく、自前で法律家を養成できるようになるのは1918年のハンブルク大学の創立を待たなければならない。他郷の大学で学んだ後に帰郷したのものにとって、地元のソサイエティに加入することはふたたび地域社会に包摂されるために必須であった可能性がある。また彼らが不在のあいだ、顔をつなく

意味で家族や親族の誰かがソサイエティに加入しているケースもあった。

ハンブルクでは古くから財団の活動が活発であった。困窮者を支援する救貧財団、困窮者に低家賃の住宅を提供する住宅財団、貧困子弟に学校教育を施すことを目的とする無料学校支援財団など、各種の慈善財団が発達した。また学生ら就学者に奨学金を賦与する助成財団も多数存在した。学生を出すことは多額の費用を要し、それはそこそこの裕福な家でもけっして楽なことではなかった。学生はしばしば貧者の扱いを受け、このため助成財団も慈善財団に加えることができる (Johannsen, 2020)。

助成財団から奨学金を受給したものの名簿が残っている場合がある。かつて奨学金をうけたものの名を地域や国の人名事典に探しても無駄であった。これはかつて調査したことのある近世のブラウンシュヴァイク公国にもおなじことが言える (Sasaki, 2016)。しかし今回はかつて気づかなかった新しい発見があった。奨学金を提供する助成財団の役員の名はかなりの率で地域に人名事典にみだすことができる。しかも人名事典に名前が残るような功績をあげたために財団役員に選出されたというケースばかりではない。財団役員を経て後に人名事典に録されるような功績をあげるものも、おなじようにみられる。財団の役員会は、年長の役員たちが将来要職につく可能性のあるものを鍛える場として機能していたという感触を得た。

財団はその趣旨に慈善を掲げるものがほとんどで、将来を嘱望されたものは早い段階で福祉関係の業務を体験したことになる。公的な職歴をみても、将来要職に就くものが早い時期に救貧関係の職を経験しているケースがよくみられる。要職就任者のソサイエティ会員歴、財団役員歴を埋める作業を今後もつづけることで、ここで得られた仮説の検証に取り組みたい。

つぎにハンブルク市民の残したエゴ・ドキュメントの考察からは以下の成果が得られた。アメリカの歴史社会学の泰斗シーダ・スコッチポルは、アメリカにおける結社の変遷を考察したさい、「昔の紳士、淑女、事業者、政治家、専門家、令名高き夫人、社交界の名士らの略伝」では、「友愛結社、退役軍人結社、婦人結社、市民結社」の会員や役員であることが誇らしげに公言されているという (スコッチポル、2007年)。スコッチポルはこれらのエゴ・ドキュメントと正面から取りくんだわけではないが、市民の自伝等から彼らの結社での活動歴が浮かびあがる可能性を示唆して余りある。たしかにアメリカン・ドリームを体現するベンジャミン・フランクリンの『自伝』からは、彼が結社において有益な知識や情報ばかりか有力な縁故を得て、紙幣の印刷という商機をつかんだことがわかる (シュタイナート、2021年)。エゴ・ドキュメントの考察は結社研究にとって不可欠である。アメリカほどではないとしてもこれはドイツにも妥当するであろう。

ハンブルク市民の残したエゴ・ドキュメントに関して、ハンブルク滞在中に刊行された史料数点と未公開の日記1点を検討することができた。1792年から1848年まで記録がのこっているフェルディナント・ベネケ (1774-1848) の日記は、すでに1816年までが刊行済みである。ベネケの日記の編集を指揮したフランク・ハチエによると、ベネケは1795年ハンブルクに定住した翌年、「愛国協会」の愛称でこんにちも親しまれる「ハンブルク技芸・工芸促進協会」(1765年発足)に入会している。日記に記された入会動機のひとつに、「ジーベキングの心をつかむ」とあった。そのうえで、「学位授与、社交界デビュー、市民権取得のしかるべき儀式を催す」とある (Hatje, 2007)。ジーベキングとは、当時のハンブルク経済界きっての実力者で、愛国協会の理事も務めたゲオルク・ハイブリヒ・ジーベキング (1751-1799) である。ベネケが愛国協会に入会したのは、それが「できるだけ多くの人と交わる」ための近道だからである。新参者にとって、協会は縁故をつかみ人脈を築くための好個の場所であった。ベネケは見事ジーベキングの知己を得ることに成功した。彼はそれ以外のさまざまな協会活動にも顔を出している。地元の高名な商人と数名の市参事会員によって構成される「赤い家クラブ」について、彼は日記に、「このクラブはわたしにとって、人脈づくりという点で下級裁判所の10の幹部会よりも重要である」と記している (Hatje, 2007)。公的な職よりも社交の場が人脈形成に威力を発揮した。ベネケは1816年に年長者会書記という福祉関係の要職に選出され、亡くなるまで32年間この職にとどまった。協会のような結社は社会の民主化のための細胞として機能したと評価されがちであるが、それ以上に、ベネケのような新参の入会者にとっては人脈形成のための場と意識されたのである。

また協会の推進役にとって、そこは有望な後進を発掘し育成する場でもあった。ハンブルク州立公文書館には、先述したフェルディナント・ベネケの息子オットー・ベネケ (1812-1891) の1840年以降の日記が残っている。オットーは1842年市参事会書記の候補にあがるが、選挙の結果彼は次点にとどまった。このとき彼のとった態度が敵方ばかりか味方にも響きを買ったようで、彼は四面楚歌に陥る危機に瀕した。選挙でオットーを支援したふたりの元市長がオットーの将来を案じ、オットーを彼らが主催した文学読書協会の会長に抜擢した。ふたりの元市長は一時的にオットーを由緒ある協会の傘下におくことで、彼の将来を守ることができた。協会の人材育成機能が見事に発揮されたケースである。オットー・ベネケはのちに市長ハイブリヒ・ケリンクフーゼン (1796-1879) に見込まれ、ついに1863年、念願の市参事会書記兼公文書館館長の職を手にする。1869年には、この年市長ケリンクフーゼンが自分の名を冠して設立した学術・芸術企画助成財団の4人の管財人のひとり指名される。経験を買われ今度はそこで後進の育成に携わることになった。

日記、自伝、回想録等のエゴ・ドキュメントが結社研究のための有望な史料となることがわかった。今後もハンブルク市民のエゴ・ドキュメントの考察をつづけたい。同時にここでの考察結果を補完する意味でハンブルク外の代表的なエゴ・ドキュメントとも取りくみたい。これらの考察結果に先述の要職就任者の結社会員歴、財団役員歴から得られる情報を組み合わせることで、研究成果に奥行きをもたせることを目指したい。

最後に当該研究課題について、これまでに発表できた研究成果を挙げる。

Sasaki, Hiromitsu, Historische Studien zu den Stipendienstiftungen an der Universität Basel in der Frühen Neuzeit, in: *Beiträge zur Ritterordens-, Preussen- und Städteforschung. Festschrift für Roman Czaja zum 60. Geburtstag*, hrsg. v. Jürgen Sarnowsky usw., Debrecen 2020, S. 636-667. 邦語として、

佐々木博光「近世バーゼル大学の助成財団」『人間科学：大阪府立大学紀要』16号、2020年、31-72頁。

ハインツ・シュタイナート著（佐々木博光訳）『マックス・ヴェーバーに構造的欠陥はあるのか 論破しがたいテーゼ』ミネルヴァ書房、2021年。

Sasaki, Hiromitsu, Die Ausbildung der Begabten in einer westlichen und einer östlichen Handelsstadt Hamburg und Osaka im Vergleich (2022年12月14日、ハンブルク大学史学科輪講会での発表)

佐々木博光「ソサイエティ再論」『フェネストラ 京大西洋史学報』第7号、2023年、1-11頁。

佐々木博光「フーコーに構造的欠陥はあるのか『監獄の誕生 監視と処罰』 富者と貧者の規律 転換」(ドイツ史研究会第1回例会発表、2024年4月20日。なお発表内容は、<https://www.youtube.com/watch?v=ICQqQpQIFew>。なお、発表原稿は、有斐閣出版から近時出版予定の金澤周作監修『福祉の世界史』に掲載予定)

ひきつづき研究成果の発表を急ぎたい。

引用文献

Johannsen, Imke, *Stifter und Stiftungen im frühneuzeitlichen Hamburg*, Göttingen 2020.

Sasaki, Hiromitsu, Stiftungsgeschichte im Herzogtum Braunschweig von 1528 bis 1798, in: *Braunschweigisches Jahrbuch für Landesgeschichte*, Bd. 97, 2016, S. 55-91.

Hatje, Frank, Kommunikation und Netzwerke in den Tagebüchern Ferdinand Benekes, in: *Hamburg und sein norddeutsches Umland: Aspekte des Wandels seit der Frühen Neuzeit: Festschrift für Franklin Kopitzsch*, hrsg. v. Dirk Brietzke usw., Hamburg 2007, S. 234-253.

シーダ・スコッチポル著（河田潤一訳）『失われた民主主義 メンバーシップからマネージメントへ』慶應義塾大学出版会、2007年。

ハインツ・シュタイナート著（佐々木博光訳）『マックス・ヴェーバーに構造的欠陥はあるのか 論破しがたいテーゼ』ミネルヴァ書房、2021年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 9件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 7
2. 論文標題 ソサイエティ再論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フェネストラ	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 14
2. 論文標題 特集「中世のユダヤ人」に寄せて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 14
2. 論文標題 中世のユダヤ人迫害、その動機づけの歴史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 9
2. 論文標題 中世のユダヤ人 とともに生きるとは	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩波講座 世界歴史	6. 最初と最後の頁 263-280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 104
2. 論文標題 マルティン・ルターと利息 「正当徴利」の登場	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 704-735
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ルイーゼ・ショルン=シュッテ著 (佐々木博光翻訳・解題)	4. 巻 40
2. 論文標題 カール・ランプレヒト 産官学連携のなかの文化史 その5	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文学論集	6. 最初と最後の頁 141-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiromitsu Sasaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Historische Studien zu den Stipendienstiftungen an der Universitaet Basel in der Fruehen Neuzeit	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Beitraege zur Ritterordens-, Preussen- und Staedteforschung. Festschrift fuer Roman Czaja zum 60. Geburtstag-	6. 最初と最後の頁 635-667
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 39
2. 論文標題 カール・ランプレヒトー産官学連携のなかの文化史ーその 4	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学論集	6. 最初と最後の頁 89-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 博光	4. 巻 16
2. 論文標題 近世パーゼルの助成財団	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間科学	6. 最初と最後の頁 31-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Hiromitsu Sasaki
2. 発表標題 Die Ausbildung der Begabten in einer westlichen und einer oestlichen Handelsstadt Hamburg und Osaka im Vergleich
3. 学会等名 Ringvortrag bei der Abteilung der Geschichte des Mittelalters an der Universitaet Hamburg (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木 博光
2. 発表標題 甚野尚志編『疫病・終末・再生 中近世キリスト教世界に学ぶ』合評会
3. 学会等名 早稲田大学西洋史学研究会第78回大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木 博光
2. 発表標題 フーコーに構造的欠陥はあるのか『監獄の誕生 監視と処罰』 富者と貧者の規律転換
3. 学会等名 ドイツ史研究会第1回例会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ハインツ・シュタイナート著（佐々木博光訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 400
3. 書名 マックス・ヴェーバーに構造的欠陥はあるのか 論破しがたいテーゼ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------